

アントン・ブルックナーの《交響曲第5番》における 聖と俗の統合

京都大学 岡本 雄大

オーストリアの作曲家、アントン・ブルックナー(1824-1896)は《交響曲第5番変ロ長調》の終楽章に大規模な「フーガ」を用いた。本発表の目的は、このフーガの作曲、とりわけ展開部におかれた二重フーガの作曲の背景を、作曲書法という観点から明らかにすることである。

第1節と第2節では、議論の前提となる2つの書法についての歴史的状況を示す。第1節では、《交響曲第5番》の終楽章における二重フーガを可能にした前提のひとつに、「異なるものの共存」を暗示するものとしての対位法の使用があることを示す。ブルックナーは標題的な特徴を持つ2つの主題を対位法的に結びつける手法を《交響曲第3番》や《交響曲第4番》でも用いている(Floros 1980)が、《交響曲第5番》の二重フーガもこの系譜に位置づけられる。本節では、「学識的様式」としての対位法のあり方から「異なるものの共存」としての対位法のあり方へと変遷していく歴史的過程を実際に作曲された作品に沿ってたどることで、ブルックナーが標題的な特徴を持つ2つの主題を対位法的に結びつける手法を用いた背景を確保する。

第2節では、提示部末尾において提示され、展開部において二重フーガの主題となるコラルについて考察する。コラルとは本来、ドイツ・プロテスタント教会において歌われる讃美歌のことである。しかし、19世紀を通じてコラルはその本来の機能から離れ、純粋器楽曲のなかで頻繁に用いられるようになる。そして声楽的な背景が希薄化したコラルは徐々に器楽的な特質を獲得していく。本節では、ブルックナーのコラルはこうした前提の上でのみ可能であったことを示す。

第3節では、第1節と第2節での議論をふまえ、《交響曲第5番》の終楽章における二重フーガの意義を考察する。先行研究では、終楽章の主要主題とコラル主題を結びつける純音楽的な戦略については多く語られてきた(Horton 2004; Hinrichsen 2016)。しかし、これらはそれを何のためにおこなったかという根本的な問いには答えていない。本節では、ブルックナーは《交響曲第5番》の終楽章において聖と俗の領域の統合を目指したのだ、ということを示す。終楽章の主要主題は半音階的な旋回音形を持つが、これは半音階的な音形がコーダにおいて全音階のなかに還元され、解決されるというブルックナーの交響曲のドラマトゥルギーを想定したものである。このような交響曲の領域に属する主題にコラルを重ね合わせることで、ブルックナーは交響曲のドラマトゥルギーにコラルを緊密に結びつけることを図ったのである。本発表は、以上のように、19世紀後半というキリスト教芸術としての教会音楽に芸術宗教としての交響曲がとって代わろうとした時代における、ブルックナーの戦略を解き明かすひとつの試みである。